

SLAVIC RESEARCH CENTER

NEWS No.132 February 2013



新学術領域研究

◆ 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」 ◆ 総括シンポジウム開かれる

2008年12月に開始された新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は、今年度が最終年度です。そこで、これまでの研究成果を総括し、このような研究の今後の可能性について議論するために、総括シンポジウム「ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像」を1月26日（土）に早稲田大学国際会議場井深大記念ホールで開催しました。プログラムは3部構成となっており、午前の若手セッションでは、本研究にプロジェクト研究員として参加した若手の研究者の方々が、研究成果を3つの報告として発表しました。午後のセッションでは、本研究において6つ設けられた計画研究から1人ずつが報告しました。以上の9つの報告は、扱う地域から見ても、ディシプリンから見ても、非常に多彩なものとなりましたが、ユーラシア地域大国の比較という視点の有効性を示すことができたように思います。



開会の辞を述べる田畑領域代表



総括討論のパネリスト

最後の総括討論「ユーラシア地域大国比較の成果と可能性」では、初めに、司会の天児慧氏（早稲田大学現代中国研究所）と討論者の小長谷有紀氏（国立民族学博物館）から本領域研究に

対する評価や期待が質問をとまなうの形で提起され、各計画研究の代表者がそれに答えるという形で進行了。世界の将来像の明確化や学際性の重視など、今後の研究の取りまとめにとっても大変有益な議論ができたと思いました。

この総括シンポジウムは、スラブ研究センターの今年度の冬期シンポジウムを兼ねて開催されました。早稲田大学現代中国研究所には共催者となっただき、運営面でも多大な支援を受けました。なお、当日は、107 人の参加者がありました。

本研究の成果は、日本語ではミネルヴァ書房から、「シリーズ・ユーラシア地域大国論」全 6 巻として刊行されます。第 1 巻、第 2 巻は今年 3 月に出版され、その後、夏頃までに順次出版される予定です。[田畑]

◆ 第 4 班と南京大学共催の国際ワークショップ ◆ Reconsidering Empires and De-Colonization 開催



南京でのワークショップ

2012 年 12 月 21 日、南京大学ホプキンス南京センターで、新学術領域研究第 4 班と南京大学国際関係研究院の共催により、国際ワークショップ Reconsidering Empires and De-Colonization が開かれました。帝国の衰退、脱植民地化、冷戦といった別々に研究されがちな問題群をまとめて、中国と日本の研究者で議論することを目的とし、南京大学出

身でアメリカのオーバーン・モントゴメリー大学で教鞭を取るチアン・ジャイ教授（2012 年 1 月の新学術領域研究国際シンポジウムに参加）が中心的に企画してくださいました。ジャイ氏のほか、南京大学、華東師範大学、廈門大学、中国外交学院に属する中国人 8 名、日本人 3 名（秋田茂・大阪大教授、菅英輝・西南女学院大教授と宇山）が報告者・司会者として参加しました。取り上げたテーマは、時代的には冷戦期を中心としながらもポーア戦争から現在まで、地理的には東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカ、アメリカにわたる幅広いものでした。現在の微妙な日中関係とは別次元で、国際関係史について冷静で学問的な議論をすることができたのは大きな成果だったと思います。[宇山]



グローバルGOE

◆ BRIT XII (Border Regions in Transition: 移行期の境界地域) ◆ 研究大会を主催

2012 年 11 月 13 日から 16 日にかけて、北大 GCOE「境界研究の拠点形成」主催による BRIT XII 福岡・釜山大会が開かれました。BRIT は冷戦崩壊後の 1994 年にドイツ・ポーランド大会で結成された境界・国境地域に関わる研究者が集うネットワークで、ヨーロッパを中

心に大会が組織され、近年は北米・南米へと拡大しています。BRITの特徴は、通常の学会組織と違い、恒常的な事務局をもたない自発的な研究ネットワークであることです。そのため大会を誘致・主催する組織者がプログラムやスケジュールを自由に組むことになります。ただ、国境に面した2つの（違う国の）都市で開催すること、会議の間に国境を越える巡検（フィールドトリップ）を入れることが必須とされています。



福岡での大会のようす

日本でこのような巡検をスムーズにできる地域、そして何より隣国とペアの関係でその発展を考えている都市は、福岡市しか見当たらず、九州大と東西大（釜山）を共催組織に引き込むことで、BRIT XII 福岡・釜山大会が実現しました。

大会初日、佐伯浩・北海道大学総長による開会の辞に続き、主催者を代表して岩下明裕（GCOE 拠点リーダー）が、“BRIT XII: Challenges and Perspectives”と題するスピーチをおこない、その中で、ユーラシア・東アジアにおいて境界研究の拠点が不在であり、BRIT初の東アジア開催意義が強調されました。福岡国際会議場では福岡市主催による九州大・東西大の学生による討論会や、姜尚中氏の講演会も開かれました。境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) の組織により、稚内、与那国、竹富、五島など国境自治体の実務者も参加し、日本の境界研究のプレゼンスを示しました。福岡で2日間研究大会をおこなった後、参



BRIT 参加者一行、フィールド・トリップで対馬に上陸（厳原港）

加者一同は JR 九州からチャーターしたビートル号（水中翼船）で博多港から対馬厳原港に渡り、「国境の島」対馬を縦断し、財部能成・対馬市長の講演を経て、比田勝港から出港し、韓国釜山港へ入国しました。今回の船による国境越えは多くの境界研究者の関心を惹いたようです。

釜山では、東西大の真新しいセンタム・キャンパスで大会が続けられました。最終日、張濟國・東西大学総長は、昨今の日韓間の対立を念頭に置きつつ、境界間の交流を続け、境界研究を推し進めることが両国間の政治的対立、さらには東南アジアにおける対立の解決につながるとの期待を表明し、4日間に渡る大会が成功裏に閉幕しました。40カ国200名を超える参加者のスケールはBRIT史上最大となり、アジア／ユーラシア地域の研究者、特に日本、シベリア・極東ロシア、中国、シンガポール、タイ、インドの研究者群のプレゼンスは、これまでBRITを牽引してきた欧米の研究者に多大なインパクトを与えました。[岩下・藤森]

◆ 境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 一周年記念シンポジウム ◆
「日本の国境：課題と機会」



シンポジウムの様子

2013年1月22日、東京永田町の全国町村会館にて JIBSN 設立一周年記念シンポジウム「日本の国境：課題と機会」が開催されました。本シンポジウムは、2010年度から始まった笹川平和財団助成プロジェクトの成果報告の場として、北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」及びスラブ研究センターとの共催によりおこなわれました。昨今、領土問題をめぐる議論が沸騰している

こともあり、事前登録は140名に及び、当日も100名程度の参加がありました。なかでも後援の朝日新聞社の記者を始め、20名以上がメディア関係者であったことが眼を引きました。

シンポジウムは、JIBSN 代表の外間守吉・与那国町長の挨拶を皮切りに、副代表の岩下がボーダースタディーズ（境界研究）の分析手法の一つである「分断された空間（「生活圏」）」論をもとに、ベルリン、ベルファスト、エルサレム、モスタル、オキナワ（基地問題）などを比較する内外のプロジェクトの成果を参照しつつ、現場の視点（「生活圏の再構築」）から、根室と歯舞、隠岐の島と竹島、八重山・宮古と尖閣諸島の空間的つながりを考える視座を強調しました。

次いで財部能成・対馬市長が、不安定な日本の境界地域のなかで最も安定している「福岡・対馬・釜山」海域の現況と取り組みについて紹介し、自治体に属する海域という観点から、日本を取り巻く海の利益を守る切り口をアピールしました。加えて国境離島振興へむけた取り組みの遅れを批判しつつも、今後の政府方針への期待感を表明しました。

古川浩司・JIBSN 事業部会長（中京大）は、対馬から日本全国の国境地域の活動へと議論を展開し、境界自治体のコンセプトをもとに JIBSN ネットワークへの関係団体の結集を呼びかけ、近い将来の日本の国境政策づくりへ向けた提言を模索している旨を訴えました。

これらの問題提起をうけ、若宮啓文氏（元朝日新聞主筆・フリージャーナリスト）は、これまで日本が歩んできた歴史を今一度、振り返り、そのマイナスを乗り越えるため、韓国や中国との関係において、日本から一歩踏み出すことが重要だとする趣旨からコメントをおこない、北方領土問題、竹島を中心に解決のためのアイデアを示唆しました。

質疑応答では、松田和久・隠岐の島町長を始め、五島市、小笠原村ら自治体関係者、パネリスト、参加者の間で激しくも刺激的な応酬が続きましたが、高い位置から抽象的に「領土」を議論する傾向の強い東京の論壇に向けて、現場からの視点や（中央が無関心な）生存の身体性を突きつけることを目指したシンポジウムの目標は十分に達成されたと思います。センセーショナルな事件にのみ眼を奪われることなく、地道に境界地域を考え続ける JIBSN の存在意義はまさにこれからが正念場を迎えることになるでしょう。

なお本シンポジウムの記録は、JIBSN レポートとして後日、公刊される予定です。議論の様も Ustream など一部配信されます。[岩下]

◆ 第8期展示「知られざるクリル・カムチャッカ：ロシアから見た境界のイメージ」開幕 ◆

2013年1月25日～5月26日迄、北海道大学総合博物館において、本GCOEプログラムが監修する博物館展示「知られざるクリル・カムチャッカ：ロシアから見た境界のイメージ」を開催中です。

北海道から見ると遠い向こうの世界であったクリル（千島）列島やカムチャッカ半島は、ソ連やロシアの人々の目にはどのように映ったのか。画家が残した膨大な絵画や、科学者が研究対象とした鉱物資源、水産・林産資源を通じて、「近くて遠い」クリル・カムチャ

ッカの過去・現在・未来を理解し、境界問題を考えることが本展示の目的です。入館料無料、どなたでもご覧いただけます。[藤森]



第8期展示のようす

◆ 『境界研究』、Eurasia Border Review 発行される ◆

GCOE「境界研究の拠点形成」が編集する査読誌『境界研究』第3号および英字誌 *Eurasia Border Review* Vol.3, No.2 が2012年秋に発行されました。いずれもHPからダウンロード・閲覧いただけます（URL <http://borderstudies.jp/>）。[岩下・藤森]

研究の最前線

◆ ソウル大学ジョイントシンポジウム ◆
分科会「ポスト・ソ連諸国における政治状況」

スラブ研究センターとソウル大学のロシア・東欧・ユーラシア研究所（IREEES）との合同分科会は、12月8日（土）13：00から16：45まで、センター大会議室でおこなわれました。総合テーマは「ポスト・ソ連諸国における政治状況」。はじめに両組織の代表である宇山智彦スラブ研究センター長と Kyung Hoon Leem 社会科学カレッジ教授によるオープニング



ソウル大ジョイント分科会

スピーチがあり、このような共同研究会の形で両組織の研究協力を継続することの深い意味が確認されました。研究発表は2部構成。第1部では Jaewon Chung 講師による「ネオリベラル・グローバリゼーション時代の権威主義体制下のロシア市民社会」、およびセンター松里公孝教授による「文脈化された暴力：ダゲスタンにおけるいわゆる対テロ戦争をめぐる政治」が発表され、それぞれの地域における政治状況と、その基底にある社会構造の現状が議論されました。第2部は国際関係に話題が絞られ、SNU 政治・国際関係学部の大学院生 Sarang Jeong による「プーチン大統領治下のロシアの対米政策：中央アジアにおける米軍駐留問題」、北大文学研究科大学院生アセリ・ビタパーロヴァの「タジキスタンのロシア観：2000年代初期以降の両国関係をめぐる議論」の2報告がおこなわれました。当日はセンター滞在外国人研究者や大学院生を含む23名（うち外国人6名）が参加し、活発な議論が交わされました。[望月]

◆ 2013年度「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」◆ に関する公募結果

12月9日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において、2013年度「スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関するプロジェクト型共同研究および共同利用型個人研究に関する応募者を審査した結果、次の方々をお願いすることに決定いたしました。[宇山]

2013年度採択者一覧

1. プロジェクト型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
上田 洋子	早稲田大学／非常勤講師	スラブ・ユーラシア地域における東洋伝統演劇の受容と表象に関する研究
等々力政彦	トゥバ民族音楽家	トゥバ語地図：ロシア連邦内での交流の開始
鳥山 祐介	千葉大学文学部／准教授	近現代ロシア文化史における祖国戦争

2. 共同利用型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
安達 大輔	日露青年交流センター／フェロー	ロシア・ロマン主義文学と同時代のバレエにおける身振り表現の比較
江畑 冬生	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／日本学術振興会特別研究員（PD）	北東ユーラシア地域チュルク諸語の類似と相違の研究
扇 千恵	同志社大学／嘱託講師	1960年代以降1985年に至るソ連映画の実情を探る
巽 由樹子	東北大学東北アジア研究センター	近代ロシアにおける正教系定期刊行物と世論形成の関係についての研究
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系／助教	露亜銀行の対中央アジア経営戦略：1910年代のアルファルファ取引を中心に
嶋田 紗千	世田谷美術館学芸部美術課学芸員	ユーゴスラヴィアの都市と美術について
醍醐 龍馬	大阪大学大学院法学研究科／博士前期課程	榎本武揚と日露関係
古川 哲	東京外国語大学／非常勤講師	文化的現象としてのプラトーフ再評価：60年代以降のソ連への視点

村知 稔三	青山学院女子短期大学／教授	近代ロシアにおける乳幼児の生存・生活の歴史に関する基礎的研究
ヨフコバ四位 エレオノラ	東京大学、筑波大学、東京外国語大学／非常勤講師	ブルガリア語の冠詞の意味と機能について

◆ 2013 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ研究センターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。2013 年度も昨年同様に募集をおこないます。募集人数は若干名とし、助成対象者は原則として博士後期課程の大学院生です。助成期間は 1 週間以上 3 週間以内です。滞在期間は、原則として 2013 年 7 月から 2014 年 2 月の間。センターの行事をご勘案の上、決めていただければと思います。最終的な日程の調整は、ホスト教員とおこなうことになります。滞在中に一度、自身の研究について発表することが義務づけられます。公募締め切りは 4 月末です。募集要項・応募用紙はセンターのホームページで参照およびダウンロードできます。[望月]

◆ 2012 年度特任教員（外国人）の変更 ◆

昨年 11 月から赴任予定だったベクス・ゴンチャロヴァ、ネリー氏が事情により今年度の来日が困難となったため、副候補者として選抜されていたジダノフ氏を招へいすることに決定しました。氏はすでに来日し、研究活動をおこなっています。[大須賀]

ジダノフ、ヴァジム (Zhdanov, Vadim)

所属・現職：フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン＝ニュルンベルク宗教・布教学講座助教授

研究テーマ：プーチン時代のロシアにおける「宗教」の語られ方：現代ロシアの映画とテレビ番組の中での「宗教的」という言葉に込められた社会構造

予定滞在期間：2012 年 11 月 1 日～2013 年 3 月 31 日（5 ヶ月）

ホスト教員：松里

◆ 専任セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2012 年 11 月 26 日：長縄宣博 “Toward a Seaborne Empire? Bolsheviks in the Arabian Peninsula, 1924-1938”

センター外コメンテータ：黒木英充（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）

今回のペーパーは、最近長縄氏が取り組んでいる、タタール人の革命家・外交官カリム・ハキモフ（1892-1937）の伝記的な研究の一環でした。それは、1920-30 年代のソ連が汎イスラーム主義や通商を利用して、大英帝国、イタリア、オランダなどの利害が錯綜するアラビア半島の紅海沿岸部に影響力を投射する様を、ハキモフをはじめとする個々人の目線から描写する試みでした。それを中東研究の視座から点検していただくために、討論者には、東方問題など西欧列強の介入が著しかったオスマン朝のシリア地方がご専門の黒木先生をお招きしました。

議論では、汎イスラーム主義をめぐる地政学でソ連を組み込むことが有益であること、また、列強が自国民や現地のムスリムを介して地域内部の政治に深く入り込んでいく様は比較研究

に開かれていることなどが確認されました。他方で、ソ連のアジア政策や内政・外交・貿易との連関など、この研究をソ連外交や戦間期の国際秩序の全体像の中に位置づけていくうえで必要な課題も浮き彫りになりました。

2013年1月16日：田畑伸一郎 “The Booming Russo-Japanese Economic Relations: Causes and Prospects”

センター外コメンテータ：服部倫卓（ロシアNIS貿易会）

今回の論文は国際学術誌 *Eurasian Geography and Economics* の2012年53巻第4号に掲載されたものです。これは日本特集号で、日ロ、日中、日印の経済関係がまとめて分析されています。田畑論文は第二次世界大戦後から現在に至るまでの日ソ、日ロの貿易関係をまとめたもので、2000年代に入って急速に日ロの貿易が拡大していることに注目しています。討論者の服部さんからは、二国間貿易統計分析という方法論、通時的な枠組み以外での分析方法の必要性、1990年代は空白期でよいか、ロシア統計の変化を考慮すべきなどの問題が提起されました。専任研究員からは、ロシア貿易の東方シフトはどこまで言えるのかなどの論点も出されました。本論文は、田畑氏が中心に引っ張ってきた新学術領域研究の比較地域大国論の成果の一つでもあるとのことでした。

2013年1月17日：野町素己 “Contact-induced Replication: Some Diagnostics”

センター外コメンテータ：ロムアルド・フシチャ（ワルシャワ大学及びヤゲロー大学）

野町論文は Bernd Heine 氏との共著で、M. Robberts & H. Cuykens 編の *Shared Grammaticalization with Special Focus on Transeurasian Languages* (Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2013年刊行予定) に所収予定のものです。共著者との連携もあり、対象言語がスラブ圏を越え、世界全体に及んでいます。難解な言語学の、しかも専門的言い回しの多い英文原稿であったため、他分野の業績を読み慣れている専任研究員にも骨の折れる論文でした。しかし野町氏がさらに飛躍しつつあることを確かに感じさせる大論文でした。討論者のフシチャ氏によれば、従来の言語変容は、連語連合ないし借用で説明されてきたが、野町氏は、相互的ないし共同の変容という第三の分析枠を作り出しているという評価を与えていました。スラブ圏の歴史との関連を考えると、社会言語学が新しい地平をロシア東欧史に与えてくれるのではという期待を抱かせる野町論文でした。

2013年1月26日：ディビッド・ウルフ “The End of Multinational Harbin”

センター外コメンテータ：高尾千津子（立教大学）

ウルフ氏がもともとの研究の原点ともいえるハルビン史に再挑戦した論文です。まだ投稿先は決まっていないとのことでした。個人史、社会史、国際関係史、鉄道史、党史、そして都市史の総合としてのハルビン史を構想したものです。多様な民族によって構成されたハルビン市、その不可欠な構成要素だったロシア人が満州国の成立から戦後にかけて次第に消えてゆく過程を多面的に追ったものです。討論者の高尾氏は、ロシア系住民の古い歴史、鉄道技術者としてのロシア系住民、さらにはロシア系ファシスト党の存在など、ハルビンとロシアとの深いかかわりを指摘しました。ロシア系といっても、ロシア革命後はソ連国籍を取得するものと、無国籍を維持するものに分かれたこと、ソ連への帰還者がほとんど粛清されてしまう現実など、1930年代が、どこにしようと、ロシア人にとって本当に受難の時代だったことを改めて感じました。

2013年1月29日：望月哲男 『アンナ・カレーナ』を読む

センター外コメンテータ：大西郁夫（北海道大学文学研究科）

望月氏が数年前に刊行した新訳『アンナ・カレーナ』の訳業を基礎に、同書をどう読み解くのか、その神髄が示された書物からの抜粋が論評の対象になりました。討論者の大西さんから、ロシア文法の解説書として読むべきか、ロシア文学の手引きとして読むのか、という二つの読み方をめぐって様々な問題点が提起されましたが、ロシア文学をロシア語に即してこのように深く読み込んだ解説は稀有であるという高い評価が示されました。若い研究員からは、ロシア文学読本の『教師用教材』として使いたいという声も聞かれました。本書はある種の新しい文学評論を切り開いているのかもしれない。

2013年1月30日：宇山智彦「セミパラチンスク州知事トロイニツキーとカザフ知識人弾圧」
センター外コメンテータ：西山克典（静岡県立大学国際関係学部）

ロシア帝政史を論じる宇山氏が地方行政長官の個人史にまで踏み込んで、そこからロシア帝国の属人的な側面を逆照射しようとする新機軸の論文です。通常のロシア史では名前が出ることない地方役人を取り上げるということ自体が、日本におけるロシア史の学問的水準の高さを物語るものですが、討論者の西山氏が、関連するいくつかの史料集に当たって、宇山論文の批判的なコメントをするというのは、まさに日本のロシア史研究の真骨頂と言ってよい光景でした。本論文が所収される『新史料で読むロシア史』は今年定年退職される複数のロシア研究者の記念論集とのことですが、確かに、一つの時代が終わり、新しい時代の到来を象徴する一冊になるかもしれません。

2013年2月4日：岩下昭裕「中口国境交渉の今：ヘイシャーズ島から考える」
センター外コメンテータ：山添博史（防衛研究所主任研究官）

最近の中口国境問題から少し距離を置いて、日本と世界の境界研究に専念していた岩下氏が、最後まで残っていた中口間の領土問題を取り上げ、2004年に締結された中口間の東部国境補足協定を、現地での調査をもとに書き上げたのがこの論文です。文系には珍しい共著ですが、その相棒は伊藤薫氏です。伊藤氏はグラフィックの専門家で、センターの準専属としてこれまで多くのポスターなどを手掛けてきましたが、今回は丹念で独自の地図作りを担当したとのことで、共著に値する、というのが岩下氏の弁でした。もちろん、文章はすべて岩下氏によるものです。討論者の山添氏は「日口関係も日中関係も特別なものではなく、普通の国家間関係になっている」という、コロンブスの卵ともいえる指摘をおこない、東アジアの国際関係の特徴づけました。またこれも卓見でしょう。歴史問題と国境問題の絡み合いは今の日本にとって、南を見ても、西を見ても難問となっていますが、中口関係は「フィフティ・フィフティ」論と同様、検証しておくべき対象のようです。

2013年2月7日：家田修“From Dialogue to Trialogue among Party, Academy, and Society: Gabcikovo-Nagymaros Dam Issue in the Socialist Hungary in the 1980s”
センター外コメンテータ：長與進（早稲田大学政治経済学術院）

今回の論文は報告者が昨年秋にスロヴァキアの南部にあるコマルノ市のシェエ大学でおこなわれた国際ワークショップで口頭発表したものを、史料などで拡充して書き下ろしたものです。1980年代におけるハンガリーの政治改革において、ドナウ川ダム問題は、政治的な公共圏を生み出す決定的な契機となったという主張が論文の核心です。討論者の長與氏からはドナウ川ダム計画の詳細やこの問題に関するハーグ法廷の判決も詳細に紹介されました。研究員からは、スロヴァキア側の状況などがもっと語られるべきだなどの批判がでましたが、一般にこの問題はスロヴァキアとハンガリーの二国間関係で語られてきました。しかし、当初からソ連の関与があったことが今回の論文で明らかにされ、今後は、ソ連史とのかかわりも含めて、幅広くドナウ川ダム問題を語る必要性が話題となりました。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 131 号以降、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。ただし、今号で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

- 11 月 5 日 R. アレグザンダー（カリフォルニア大、米国）“Accent Shift in South Slavic Dialects: The Significance of Retraction”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 11 月 7 日 A. スタンジアニ（社会科学高等研究院、フランス）「世界システム論、経済的後進性の議論を越えて：ロシアの農奴制とその残滓を再検討する（英語）」（SRC 新学術領域研究セミナー）
- 11 月 8 日 本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）「ロシアのパイプライン・ジオポリティクス」（SRC 新学術領域研究セミナー）
- 11 月 10 日 第 9 回一緒に考えましょう講座 家田修（センター）「原発被災地 飯館村のいま：地域の視点から」
- 11 月 13 日 V. ツァチェフスキ（国際交流基金招聘海外研究員、ブルガリア）“Energy Management Policies in Southeastern Europe”（センターセミナー）
- 11 月 22 日 第 10 回一緒に考えましょう講座 『シェーナウの想い：自然エネルギーを子どもたちに』映画と解説
- 11 月 24 日 関啓子『コーカサスと中央アジアの人間形成：発達文化の比較教育研究』（明石書店、2012 年）合評会 村知稔三（青山学院女子短期大）「教育学・教育史の視点から」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 11 月 27 日 山崎佳代子（詩人・翻訳家、ベオグラード大）「イスイドラ・セクリッチとセルビアにおける日本文化の受容」（SRC 新学術領域研究セミナー）
- 12 月 9 日 滝口良（北星学園大）「北東ユーラシア地域における社会主義体制下のライフヒストリー研究」；中山大将（学振特別研究員）「北東アジアのコリアン・ディアスポラ」（センター共同研究報告会）
- 12 月 10 日 第 11 回一緒に考えましょう講座 『東京原発』映画と解説
ドライバン・バンバジャブ（北大・院）：「ポスト社会主義モンゴルにおける民主化と市民社会に関する研究」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 12 月 12 日 スラブ研究センター第 3 回公開講演会 望月哲男（センター）「19 世紀ロシア文学の読み方：ドストエフスキー、トルストイの古さと新しさ」
- 12 月 17 日 SRC & Chemodan films 特別企画：Yesterday, Soviet Union T. ラーフェン（トロント大、カナダ）『The Province of Lost Film』映画と解説；G. エゲンベルディエヴァ（同）『Oh, my Communist youth!』映画と解説（翌日にも同じ企画あり）
- 12 月 18 日 ラウル・ワレンバーク記念映画上映会 『こんばんは、ワレンバークさん』
- 12 月 25 日 S. コラド（ペパーダイン大、米国）“Imperialist Domination or Internal Colonization? G.I. Nevel'skoi and Russian Acquisition of the Amur River Basin, 1849-1860”（センターセミナー）
井上岳彦（北大・院）「カルムイキア史跡探訪 1」（北海道中央ユーラシア研究会昼食懇談会）
- 1 月 9 日 第 12 回一緒に考えましょう講座 『相馬看花：第一部、奪われた土地の記憶』映画と解説
- 1 月 11 日 A. ブリュムバウム（センター）“Священная брань: к интерпретации поэмы А. Блока «Возмездие»”（センターセミナー）
- 1 月 12 日 宗野ふもと（京都大・院）：「手織り物はどうな財産か：ウズベキスタン・カシュカダリヤ州北部の事例から」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 1 月 21 日 等々力政彦（大阪大）「唐努烏梁海四旗之印：その発見と歴史」（客員研究員セミナー）
- 1 月 24 日 中国人研究者によるロシア極東の分析 龐冬梅（センター）「ロシアにおける組織犯罪の問題とそれとの闘い（ロシア語）」；封安全（黒竜江省社会科学院、中国）「黒竜江省とロシア極東地域の農業協力の現状と今後の課題（ロシア語）」（センターセミナー）
- 1 月 26 日 第 13 回一緒に考えましょう講座 井戸謙一（弁護士、元裁判官）「原発訴訟のゆくえ」

二都物語：サッポロでヴィリニウスについて書く ということ

セオドア・ウィークス（南イリノイ大学歴史学部／
センター 2012 年度特任教授）

私が想像するに、リトアニアのほとんどの人が地図上で北海道を正確に指し示す事ができないだろうし、札幌の人のほとんどがヴィリニウスについてよく知らないだろう。なぜ、ずっと先延ばしにしてきたリトアニアの首都に関する本を書き始めるのに札幌を選ぶのか？

その理由は個人的なもの、専門的なもの、実的なものと多くある。北海道とは反対の南端の島、沖縄で生まれたアメリカ人としては、数ヶ月間日本で暮らす機会は非常



ヴィリニウスの創始者・リトアニア大公ゲディミナスの像

に魅力的なものだった。北海道大学スラブ研究センター（SRC）は国際的に高い名声を有していて、外国人研究員プログラムの前任者たちは、ここでどれだけ仕事がかどったかということに言及し、この研究所を賞賛していた。そして、私が札幌に滞在する可能性があることをワルシャワの歴史家たちに語ったとき、彼らは皆ノーマン・デイヴィス（訳注：ポーランド史の大家として知られる）がここで本の一部を書いたことを知っていた。本当におすすめの場所なのだ！

そして、事実、私の SRC に対する期待は達成された。ソ連用語を使えば、「超過達成」と言ってもいいかもしれない。センターの教員も事務職員も、素晴らしい日本の礼儀正しさ（幸運にも、このステレオタイプは正しかった）で、日本のお役所仕事（それは存在する）に対抗しつつ、私の訪問を容易かつ快適なものになるよう努力してくれた。図書館は本当に素晴らしいことが証明された。私が東アジアで見つけることなど思いもしなかったリトアニア語の文献を複数所蔵していたのだから。北海道大学留学生センターで留学生たち（私のような、留学生以外の者に対しても）の日本語学習を支援している、温かくフレンドリーな山下教授と諸先生方にも賞賛を送らなければならない。

私の研究対象であるヴィリニウスは 20 世紀半ばまで、どの民族も多数派となることのなかった都市であった。1795 年から 2000 年までの（もしかしたら、リトアニアが NATO と EU に加盟した 2004 年まで）長い期間にわたって、国家権力、民族アイデンティティ、そして都市の発展がどうお互いに関係しあっていたのか、ということが私の関心である。ユダヤ人、ポーランド人、リトアニア人（そして 1914 年まではロシア人）にとってこの都市がいかに重要であったか、ということも私の研究の主要テーマである。19 世紀、ロシア帝国は街路にロシア語の名前をつけ、正教会を建設することによって、そして 1880 年代から顕著だったのが、ロシアの文化的（プーシキン）・政治的（皇帝エカテリーナ）人物の記念碑を建てることによって、ヴィリニウス（ロシア人にとってはヴィリナ）のうわべの景観をロシア風にしようとし



聖アンナ教会（ヴィリニウス）

それぞれの政治体制の変化によって、街路の名称から公共芸術、ある民族集団の他の民族に対する特権にいたるまで、都市もまた直接的に影響を受けた。最も悲劇的であったのは、この都市の1939年の時点の人口のほとんど全てが第二次世界大戦中とその直後に殺されるか（ユダヤ人コミュニティ）、追放された（ポーランド人）のである。ソヴィエト・リトアニアの首都の建設にもまた驚くべきエピソードがあるが、それについては現在のほとんどのリトアニア人は語るのを避ける。彼らはソヴィエト期の全てを抑圧とロシア化と考えたがる。確かに、そのような考え方があるが、共産主義者もまた民族文化のある面については奨励しようとしていたのである。ソヴィエト・リトアニアの指導部は民族的にはほとんどがリトアニア人であったし、1980年代後半にはリトアニアの共産主義者は（皮肉っぽく言えば）賢くも自分たちとモスクワとの関係を絶ち、リトアニアの独立性を賛美したのである。1990年以降、ヴィリニウスは公的に二カ国語使用のソヴィエト・リトアニアの首都から、ほぼ単一言語の都市となった（それでも、街中でロシア語とポーランド語が聞こえてくるのがままあるが）。再び、街路の名称と街中の記念碑はリトアニアの文化的・政治的重要人物のものとなっている。以上が簡単に言えば、私が伝えたく、札幌で書き始めたかった物語なのである。

札幌に来る前、この都市がヴィリニウスとは全く異なることを知っていた。私の年代の多くのアメリカ人がそうであるように、私は札幌をおもに1972年の冬季五輪の開催地として、そして日本の最北端の大都市として知っていた。しかしながら、この都市がどれほど若いのかは理解していなかった。1945年以後でさえ、函館の方が栄えていたということに私は驚いた（私はこの魅力的な街の名前を聞いたことさえなかったことを認めよう）。ウィリアム・クラークの名前もまた私は知らなかった。ヨーロッパとイスラエルの大学で学び、研究してきたが、北海道大学のキャンパスがまさに故国アメリカのようであることは驚きであった。イリノイのカーボンデールと同じようにポプラとエルムの並木道まであるのだ。事実、街全体も私にはヨーロッパというよりはむしろアメリカの街のように感じられた。それはアメリカの名前がついたコンビニが沢山あったからではない（ローソン、セブンイレブン）。

札幌での5ヵ月を振り返ると、私のフェローシップがとても速く、同時に喜ばしく過ぎ去ったことに驚いている。私は札幌で、刊行予定の本の各章をあらかじめ書き終えた。1795年までの「歴史の始まり」、ソ連支配の終焉までの道程、リトアニア国民国家の首都の創造（1980～2000）などである。私は札幌と、講演を行った京都で多くの良き同僚に会い、日本で高等

た。最終的には、1915年9月にドイツ軍が侵攻したとき、ウィルナ（ドイツ風の言い方）はポーランド人とユダヤ人の街となり、1世紀以上続いたロシア支配の痕跡は消えたのである。

20世紀、ヴィリニウスは数回にわたって所有主を変えている。2度の世界大戦におけるドイツの占領、1920～1930年代のポーランドによる支配、1940年代にはソ連に組み込まれ、やっと1990年代から独立したりトアニアの首都になった。

教育と研究機関がいかに機能しているのかについて、以前よりずっとよく理解できた（もちろん、まだ表層的であるが）。

自分の大学では通常学期の間、私は研究よりも教育にはるかに多くの時間を割いている。私が毎年（時々毎学期）行わなければならない授業は「1500～2000年の世界史」である。北海道での滞在は、数十冊の日本史に関する本を読み、アイヌについて学び、日本語を少々学ぶことを可能にしてくれた。私はパソコンで表音文字（にほん）と漢字（日本！）をタイプする方法を教えてくれたSRCの山本さんに感謝したい。アメリカ人にとって、日本は近く（英語からの外来語がたくさんあり、野球のユニホームを着た青年たちを見かける）、また遠い（漢字、交通において道路が反対、完全かつ難解に包装された食品）国である。5ヵ月の間に、私はイカやタコの揚げ物（私は“fried sea monster”と呼んでいる）が好きになり、ひらがなとカタカナを少し（しかし、いまだシとツとソの区別は難しい）学び、そして「お願いします」というフレーズを数えきれないほど使った。おそらく、最も重要なのは、日本の歴史、文化、言語、日常生活について、いかに自分が無知であるのかを学んだことである。繰り返し生徒に言っているように、教育とは問いから始まる。北海道大学スラブ研究センターでの5ヵ月間のあと、私は多くの新しい問いを立てるのに十分なほどに、札幌、北海道、そして日本について知っているのである。

ヴィリニウス — およそ千年前に築かれ、国家的、民族的、宗教的に多様な集団によって住まわれたこの都市は、札幌 — 1世紀経っていない大都市であり、圧倒的に日本人が居住し、外国に一度も支配されたことのないこの街とはかなり異なると言えるだろう。しかし、SRCでの5ヵ月のあと、この二つの都市はともに私の人生の一部となった。私は数日中にいくつかの研究を完成させるためにヴィリニウスに戻るが、出来るならそう長く時間が経たないうちに札幌に戻って来たいと思う。リトアニアでは昼飯におにぎりや“fried sea monster”を見つけることは難しいのだから。

（英語から斎藤祥平訳、大須賀監修）

札幌の印象

パン・ドンメイ（黒龍江大学ロシア研究所／
センター 2012 年度特任准教授）

今まで私は、日本に北海道という島があり、そこに札幌という美しい街があるということを、テレビや、インターネット、知人の話を通してしか知りませんでした。それに私はこれまで日本へ来たことがなかったので、この町を訪れるチャンスもなかったのです。ところが思いがけない運命の巡りあわせで、私は札幌へやってくる機会に恵まれました。こうして私は招聘研究者として丸5ヵ月も北海道大学スラブ研究センターで仕事をする事となりました。札幌へ来たのはたった半月前ですが、札幌もそこに住む人々も私にとって深い印象を呼び起こしてくれました。

空港での出迎え

2012年10月31日私は札幌へやってきました。空港で私を出迎えてくれたのは、北海道大学の大学院修士課程で学んでいるという高良さんでした。彼がロシア語をほとんど



著者



北大の銀杏並木

同じように感じています。豊富な蔵書を誇る図書室を備えたスラブ研究センターを私はすぐ気に入りました。ここスラブ研究センターで私たちは間違いなく個々の研究分野で大きな成果を挙げるものと確信しています。

美しく趣深い北海道大学のキャンパス

11月初旬、北海道大学のキャンパスはとても美しいものです。いたるところで木々の葉が様々に色を変え、緑の芝生が広がっています。特に趣深く感じたのは銀杏並木と第2農場です。毎日私は仕事へ向かうために第2農場の横を通っています。第2農場の建物は他の建物と違って全てが木造です。年季の入った、飾り気のないこれらの木造建築からは、さっぱりとして落ち着いた印象を受けます。銀杏並木のほうは、その素晴らしさが何よりも気に入っています。道の両側に居並ぶ、背が高く、手入れが行きとどいた銀杏は行き交う人びとを見守っているかのようです。黄色く色づいた木の葉は、太陽に照らされて黄金のように輝き、人びとを楽しませてくれます。銀杏の葉は美しさで人びとの目を見張らせるだけでなく、それを乾かせば咳止めや喘息の薬、痛み止めにもなると言います。それに加えて、銀杏の実のほうも健康によいものです。

自然の美しさのみならず、北海道大学のキャンパスは、私に心の安らぎを与えてくれますが、それはキャンパスにある大学草創期に活躍したクラーク博士の記念碑によるものです。北海道大学のモットーであるクラーク博士の「Be Ambitious」という言葉は前進し、困難を克服するよう私を常に奮い立たせてくれます。北海道大学のキャンパスは何と美しく、変化に富んでいるのでしょうか！

話せず、私の方でも英語が上手ではない（そしてもちろん日本語は話せない）にもかかわらず、それでも私たちは道すがら英語でやりとりをしました。高良さんについて私が知ったのは、彼が歴史を研究していること、以前4年間東京で勉強していたこと、そして妹さんが2人いることでした。そのうちの一人は中国語を話すらしいのですが、彼女は今違う町で働いているそうです。道中私たちはあれこれ話したのですが、私はこの頭の良い青年とおしゃべりするのがとても楽しかったです。高良さんどうもありがとう！

スラブ研究センター

北大スラブ研究センターの定例会議で私たち3人の外国人研究員（私は中国から、ヴァジムさんはドイツから、アルカーギーさんはロシアから）はセンターで働く皆さんに紹介されました。研究員と事務職員の皆さんは外国人である私たちにと

ても親切に接してくださるので、中国にいる時と



第2農場の紅葉
(カラーでないのが残念)

札幌の食事、温泉、雪まつり

明治時代の初め（1870年代）に豊平川の畔に建設された札幌は京都旧市街を模して計画されたとのことで、全ての通りが直角に交わる格子状となっているようです。道に迷うことがないので、私は几帳面に作られた札幌の都市計画に好感を持っています。時間があれば、私はあるいは一人で、あるいは友人たちとよく街を散歩します。札幌には日本やヨーロッパ各地の料理を出すレストランやカフェが多いので、食事の心配はいりません。歩き疲れたら、友人たちと連れ立って温泉でのんびりと過ごします。

他にも、大通公園では毎年2月に氷で作った色々な彫刻を集めた雪まつりがあるのだと聞かされました。世界的に知られた雪の彫刻の祭典をこの目で見たくて、私は2月がやってくるのをもう待ちきれません。



クラーク博士の胸像

温かい札幌の人びと

温かく私を迎えてくれた札幌の人びとはこの上ない印象を残してくれました。ある時私は友人と北大植物園の入り口で会う約束をしました。その時は植物園へ向かう道筋がよく分からなかったのですが、途中、男の子を連れて散歩をしていた日本人の男性に、どうすれば植物園へ行けるか尋ねました。その男性は親切にも私を大学の出口まで案内してから、植物園への道を指し示してくれました。私が200メートルほど進んだところ、お父さんと一緒に大学構内を散歩していたその男の子が追いついてきました。振り返ってみると、私が道を訪ねた男性がこちらへ走ってきました。彼が息切れしながら、走ってきて言うには、今日はもしかすると植物園は閉まっているかもしれないとのこと（でも何故なのかは言葉の壁のせいで良く分からなかったのですが）。私は二人にお礼を言って、友達が植物園の入り口で待っているから行かなければいけないと言いました。この日本人の親子連れの振る舞いに私はとても心を動かされました。この心温まった瞬間を忘れることはないでしょう。

札幌の街と人びと、北海道大学の忘れ難く何物にも代えがたい印象は私の心に深く刻み込まれました。

（ロシア語から千葉信人訳、大須賀監修）

ロネル・アレグザンダー先生の特別講義を聴講して

古川雅規（修士課程1年）



アレグザンダー先生と。向かって右が筆者

2012年11月5日（月）に、カリフォルニア大学バークレー校のスラヴ語学者ロネル・アレグザンダー教授が北海道大学グローバルCOE「境界研究の拠点形成」の招へいで来日され、札幌と東京で合わせて3回の特別講義が行われました。第1回はセンターが会場となり「南スラヴ諸方言におけるアクセント変化：アクセント位置後退の意味」という題目で行われました。11月9日（金）には「ユーゴスラヴィア崩壊後のアイデンティティ：イ

ヴォ・アンドリッチはまだ意味を持つか」（於：立教大学）、その翌日には「ブルガリア語方言研究：デジタル世紀における生きた伝統」（於：東京大学）という題目の講演会でした。

アレグザンダー先生は、主にスラヴ語学を専門としていますが、南スラヴ・バルカン言語文化に広く精通し、言語学だけではなく、文学研究（例えばヴァスコ・ポパ研究）やフォーククロア研究でも大きな業績を数多く残している、世界的に著名な研究者です。

私が聴講したのは第1回の講義です。ロシア語語形成論で修士論文を書く予定の私にとっては、南スラヴ諸語、方言学、歴史言語学、アクセント論といった分野はいずれも遠いものだったのですが、将来スラヴ語研究者を目指す身としていずれ勉強できればと思っている分野であり、大変貴重な機会となりました。指導教員からは、積極的に質問やコメントを試みるようにと言われ、事前にレジュメなども渡されましたが、何度読んでもあまり理解できず、実際に何か言うことができるか不安でした。しかしアレグザンダー先生の講義を拝聴してみると、先生は具体例を多く用いて、噛み砕いて説明されたこともあり、思いのほか理解が進んだのは不思議にすら思えました。

今回の講演では、スラヴ祖語に想定される「鋭アクセント」、「曲折アクセント」および「新・鋭アクセント」（ネオ・アキュート）の特徴づけから始まり、セルビア・クロアチア語の新・旧シュト方言において、そのアクセント体系にどのような変化が生じたのか、また隣接するマケドニア語やブルガリア語とは、どのようなアクセント体系の違いが形成されたかを、パヴレ・イヴィッチらの先行研究、ご自身で行われたフィールドワークのデータや他のスラヴ語のデータとの比較を踏まえて、さまざまな局面から詳細に論じられました。

私にとって特に印象深かったのは、ヴーク・カラジッチおよびジューロ・ダニッチらによる19世紀の言語の標準化に端を発する伝統的な「4アクセントシステム」は、実際の言語現象とは必ずしも一致しないということでした。また、母語話者に対して言語テストを行った結果、アクセントがある音節だけを聞かせても、「上昇アクセント」と「下降アクセント」は明確に区別できず、アクセントがある音節の次の音節で上昇があれば「上昇アクセント」、下降していれば「下降アクセント」とアクセントの種類の判断を下しているということでした。セルビア・クロアチア語とアクセント体系が全く異なるロシア語やチェコ語に取り組んでいる私は、これまであまりアクセントについて考える機会がなかったので、比較のお互いに似

ていると言われるスラヴ諸語の多様性を再確認し、改めて深い興味を覚えました。

講演終了後、特別講義に出席した人たちを中心に、サッポロ・ビール園でアレグザンダー氏を囲んでの懇親会がありました。著名な先生なので恐れ多く思っていたのですが、先生は私にも気さくに接してくださり、私が現在取り組んでいる研究に耳を傾けられ、参考文献や研究方針などで直接助言をいただくことができ、とても感激しました。

スラブ研究センターでは、国内外のスラヴ語学者を迎えた研究会や講演会が充実しており、まだ研究を始めたばかりの私にとっては難しいことも多くありますが、優れた研究者と直接お話ができるなど、多くの学術的な刺激を日々受けて、国内の他大学ではありえない大変恵まれた環境です。今後もこのような機会には、積極的に参加したいと思います。

学 界 短 信

◆ 2012 年度内陸アジア史学会大会の開催 ◆

2012 年 11 月 4 日の 13 ～ 18 時、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟で、2012 年度内陸アジア史学会大会が開かれました。同学会の大会が北海道で開かれるのは初めてでした。当日の北大キャンパスは、美しい紅葉に覆われながらも、あいにくの嵐でしたが、非会員も含め 60 名ほどの参加がありました。以下、長縄宣博氏による参加記をお読みください。[宇山]

大会は、荒川正晴先生（大阪大学）による「前近代中央アジアの国家と交易」と題する公開講演で幕を開けました。その内容は、6 世紀末頃のトルファンのオアシス国家を事例に、突厥などの遊牧国家との活発な使節団の往来がキャラヴァン交易の基盤であったとし、そしてそれによってオアシス国家の農業やその他の産業も規定されてきたことを解説するものでした。荒川先生は 2010 年に名古屋大学出版会から『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』という大著を出しておられますが、そこで言い切れなかったことを今回の講演で話したのだと何度も強調しておられたのが印象的でした。

続いておこなわれた研究発表は、北大に関係の深い 3 人の方によっておこなわれました。最初の報告は、長峰博之氏（北嶺中・高等学校）による「カーディル・アリー・ベグとその史書について：ジョチ・ウルス『内部史料』の史料的可能性とその歴史認識」でした。この史書は、15 世紀半ばにモスクワに服属したチンギス家の政権であるカシモフ・ハン国のハンに仕えていた人物が 1602 年に著したものです。長峰氏は、川口琢司先生と共同でこの史書の校訂テキストと訳註を作成中とのことで、報告内容も、思い込みが先行していた研究史上の問題点を洗い出しながら、史料を虚心坦懐に読み解くものでした。会場からは、元遊牧民による史書を「内部史料」とどこまで言えるのか、また、その執筆動機は何だったのかを確認する質問がありました。

二番目の報告は、高本康子氏（センター）による「大陸における対『喇嘛教』活動：満洲国興安北省を中心に」でした。治安当局の日本人が「ラマ教徒」の教団を整備し、かつ資格試験を実施していたという件は、ロシア帝国のムスリム宗務管理局の制度を彷彿とさせ、個人的にも大変興味を覚えました。また、現地モンゴル人と日本人が肩入れするブリヤートとの確執という論点も、日本の対ソ連外交における、越境するミクロなアクターの重要性を考える上で、示唆に富んでいました。

最後の報告者は、文学研究科スラブ社会文化論専修から 2009 年に博士論文を提出した秋山

徹氏（日本学術振興会特別研究員）でした。「ロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威：遊牧世界とイスラーム世界のあいだで」と題した報告は、ロシア語の行政文書を丹念に読み直し、数少ないテュルク語の記録も参照しながら、クルグズ社会に内在する政治権力のあり方やその変容を説明しようとする大変意欲的なものでした。

時間の制約もあり、質疑応答は事実確認に関わるものが主でしたが、想像力を掻き立てる濃密な議論は、懇親会とその後まで続いていたようでした。[長縄]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2013 年 6 月 1-2 日 比較経済体制学会 2013 年度全国大会 於新潟大学
8 月 2-4 日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
8 月 9-10 日 第 5 回スラブ・ユーラシア研究東アジアコンファレンス 於大阪経済法科大学
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/eac2013-papercall.html>
10 月 5-6 日 2013 年度ロシア・東欧学会研究大会 於津田塾大学 (JSSEES との合同大会となる予定)
10 月 23-25 日 ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所コンファレンス “Russia and the World”
ペーパー応募締切り：5 月 15 日 <http://www.helsinki.fi/aleksanteri/conference2013/>
2015 年 8 月 3-8 日 ICCEES 第 9 回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>
センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

大学院だより

◆ 麻田雅文さんの『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」 1896-1935』 ◆ 出版される

麻田雅文さんは、スラブ社会文化論専修に修士課程から在籍し、2010 年にご著書と同名の博士論文を北海道大学に提出しました。その博士論文は、2011 年 8 月に第 10 回アジア・太平洋研究賞（井植記念賞）を受賞しています。第 10 回では、上野雅由樹さん（当時、東京大学）とともに 2 名の受賞でした。そして今年 11 月に、本文、註、史料を合わせると 479 頁、参考文献が 26 頁にわたる大著が、名古屋大学出版会より出版されました。以下は、その麻田さんからの喜びの声と今後の抱負です。[長縄]



「修士、博士課程とお世話になったスラブ研究センターでの研究を、このたび一冊の本にまとめることができ、深い感慨を覚えます。拙著を簡潔にまとめるなら、ロシア人たちが 20 世紀前半の「満洲」（中国東北）で中東鉄道の経営を通じて何をしていたかの地域史であり、さらに鉄道の敷設で興隆した地域経済の変容を扱った経済史でもあり、露中日米仏など各国も鉄道を手に入れようと野心を抱いていたことで 繰り広げられていた国際関係史の研究でもある、という三つの側面があります。

今でこそ「満洲」は遠くになりけり、ですが、1945 年の敗戦までは日本の「生命線」と呼ばれた最重要地域でした。その影響は遠く北海道にも響いており、書庫をのぞけば、当時の北海道帝国大学がいかにか熱心に「満洲」について書籍を収集していたかが分かります。また日本海を挟んで向かい合うこの両地域は、対ロシア（ソ連）の最前線として日本の国防の要であっ

たと共に、ロシア文化と日本人が触れ合う磁場としても共通性がありました。中東鉄道に関する初の総合的な研究が北海道大学の一学生だった自分の手で書かれたのも、一抹の必然性があったのかもしれませんが。今後もロシアという隣国を東北アジアの歴史に接合すべく、新たなテーマで挑戦を続けていく所存です。」

図書室だより

◆ 『東洋学院紀要 Известия Восточного института』 ◆ のマイクロフィッシュ購入

帝政ロシアが1899年にウラジオストクに設置した東洋学院 Восточный институт は、当時の極東ロシアにおいて唯一の高等教育機関であり、中国学、日本学、朝鮮学、モンゴル学等、東洋学研究的振興と研究者・実務家の養成に大きな貢献をしました。その後、1920年に極東総合大学 Дальневосточный государственный университет に改組、1939年には一旦閉鎖されましたが、1956年に再興され、2010年には極東連邦大学 Дальневосточный федеральный университет に改組されて現在に至っています。ロシア極東部では、最大かつ最高レベルの高等教育機関です。

東洋学院は、創立当初の1899年に紀要の刊行を開始し、1922年までに66巻が刊行されました。ここには、東洋学院の教授陣や学生の著作および東洋学院の活動報告が収められ、ロシアのアジア研究を見るうえで欠かすことのできない資料と言えます。

北海道大学には、この紀要の現物の一部、および米国議会図書館資料から作成したマイクロフィルムがありましたが、欠けている部分が多く、全体の把握は容易ではありませんでした。

昨年度の末近くに購入した IDC 社製作のマイクロフィッシュは、一部に欠があるものの、創刊から61巻(1916年刊)までがほぼ揃っていて、北大にはいまさらという感もありますが、今後の極東ロシア史研究の発展に貢献してくれるものと期待しています。

なお、国内では、阪大外国語学図書館と東洋文庫にある程度まとまった量の原本があるほか、同じく阪大総合図書館、早大戸山図書館に、マイクロフィルムまたはマイクロフィッシュがあり、それぞれ1巻から66巻までをカバーしているもようです。[宛内]

◆ 『歴史評論 Историческое обозрение』 ◆ のマイクロフィッシュ購入

『歴史評論 Историческое обозрение』誌は、ペテルブルク大学歴史協会の会誌として、1890年から1916年まで不定期で21巻までが刊行された歴史学論集です。フランス革命史の研究者として著名であり、前年の1889年に設立されたペテルブルク大学歴史協会の会長だったニコライ・カレーエフ(1850-1931)が、創刊から終刊まで編集長を務めました。協会の性格を反映してか、西欧史や歴史理論に関する論文の比重が大きいように思われます。

なお、この資料を所蔵する機関は、国内には他に確認できません。[宛内]

◆ 『帝室正教パレスチナ協会会報 Сообщения Императорского православного палестинского общества』 ◆ のマイクロフィッシュ購入

帝室正教パレスチナ協会 Императорское православное палестинское общество は、1882年に設立されました。その活動の中心は、ロシアからの聖地巡礼者を援助するとともに、

現地の学術研究をおこなうことですが、その初代総裁にはセルゲイ・アレクサンドロヴィチ大公(1857-1905)が就き、会の規約は、皇帝アレクサンドル三世に裁可されたことが示すように、ロシア革命で帝政が倒れるまでは少なくとも、ロシア政府の後援を得て、パレスチナにロシアのプレゼンスを示す組織でもありました(ロシア革命後は、政府の後ろ盾を失い、分裂するなどのことがありましたが、それについては割愛いたします)。

帝政ロシア時代の正教パレスチナ協会の出版する定期刊行物としては、『正教パレスチナ論集 Православный палестинский сборник』と、『帝室正教パレスチナ協会会報 Сообщения Императорского православного палестинского общества』を挙げることができます。北海道大学は、前者の多くの部分を現物で所蔵する他、別途マイクロフィッシュも購入しており、1881年の創刊から1914年の第61巻までが利用可能となっていますが、後者については所蔵がなく、昨年になってようやく、1886年の創刊から1926年刊の第29巻までのマイクロフィッシュを購入することができました。これによって、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ロシアと中近東地域との関係について研究するさまざまな手掛かりが得られるものと期待しています。この資料の、国内他機関の所蔵は、確認できていません。

なお、この協会の活動については、A.A. ドミトリエフスキーが書いたその25年史 Императорское Православное Палестинское общество и его деятельность за истекшую четверть века, 1882-1907 (СПб., 1907年)があり、2008年に再刊されている他、最近では、昨年刊行された『正教パレスチナ論集』第108号が、協会創立130周年記念号として、協会の歴史を振り返る内容であることを付記します。

なお、今回紹介した3点の資料は、いずれも、現在、附属図書館で整理待ちの状態ですが、必要な場合には利用できるようにいたしますので、お手数ながら図書室までご連絡ください。[兔内]

ウェブサイト情報

◆ ウェブサイトのリニューアル ◆

スラブ研究センターは1996年4月にウェブサイトを開設して以来、その内容を次第に充実させ、シンポジウム・研究会等の迅速な案内、出版物の全文掲載といった取り組みを他の研究機関に先駆けておこなってきました。サイトのデザインや構成にも修正を加えてきましたが、やや古めかしく見えること、膨大なコンテンツから必要な情報をすぐに見つけにくくなっていることも否めなくなってきました。

そこで2012年12月3日をもって、トップページのデザインを一新し、合わせて構成を一部変更しました。主な変更点は以下の通りです。

1. これまでサイトの内容がトップページの左側に小さな見出しの形でまとめられ、それぞれの中に何が入っているかはカーソルを当てないと分からないようになっていましたが、それらをページに直接表示し、センターの活動内容が一望できるようにしました。従来スペースの大半を占めていた What's New は、ページの右側にまとめました。
2. 「共同利用・共同研究拠点」、「学部などでの教育」などのコーナーを新設しました。
3. サイト内検索を Google カスタム検索に変更し、またセンター関連の複数のドメインを横断検索できるようにしました。

この作業にあたっては、ワークステーション室の山本房子さんをはじめとするセンター・スタッフと、デザインを担当した有限会社アートバイブスにご協力いただきました。トップページ以外のデザインも、その後順次更新を進めています。

スラブ研究センターでは、今後ともインターネットでの情報発信の充実に努めてまいります。新しくなったウェブサイトをご活用いただくとともに、さらに改善すべき点があればご提案いただけると幸いです。[宇山]

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 5『中央ユーラシア研究を拓く』の刊行 ◆

北海道中央ユーラシア研究会は2012年7月に第100回記念大会を開きましたが（センターニュース第130号参照）、これに関連し、同年11月付けで報告集『中央ユーラシア研究を拓く：北海道中央ユーラシア研究会第100回記念』を刊行しました。この本は、1. 例会一覧（第1～100回）、2. 第68～99回例会報告書（報告要旨・参加記）、3. 第100回記念大会資料（ペーパー・レジュメ・参加記）、という三部構成になっています。全体を通して読むと、この会が中央ユーラシアの歴史、政治、人類学、経済、文化などの分野にわたって多くの実績を積み重ね、報告に対して率直な意見交換をしてきたことが分かります。内容はウェブサイトでも閲覧できます。[宇山]



http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic_eurasia_papers/no5/contents.html

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第60号への投稿原稿は、現在、査読結果を踏まえた修正稿が集まっており、編集委員会で再検討をおこなっております。[長縄]

会議 (2012年12月～2013年1月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2012年度第2回 12月9日

議題

1. スラブ研究センター共同研究員の選考について
2. その他

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

12月9日

議題

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について
2. その他

◆ センター協議員会 ◆

2012年度第5回 1月18日

議題

1. 教員の人事について
2. 研究生受け入れについて
3. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 131 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[宇山／大須賀]

- 11 月 3 日 思沁夫（大阪大）、串田圭司（富山大）、甲山治（京都大）、櫻井健二（国際獣疫事務局）、縄田浩志（総合地球環境学研究所）、安田裕（鳥取大）
- 11 月 5 日 Ronelle Alexander（カリフォルニア大、米国）
- 11 月 7 日 Alessandro Stanziani（社会科学高等研究院、フランス）
- 11 月 8 日 本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）
- 11 月 27 日 山崎佳代子（詩人・翻訳家、ベオグラード大）
- 12 月 8 日 Chung Jaewon（ソウル大、韓国）、Jeong Sarang（同）、LeemKyung Hoon（同）
- 12 月 17 日 Gulzat Egemberdieva（トロント大、カナダ）、Thomas Lahusen（同）
- 12 月 19 日 封安全（黒竜江省社会科学院、中国）
- 1 月 12 日 宗野ふもと（京都大・院）
- 1 月 26 日 井戸謙一（弁護士、元裁判官）

◆ 研究員消息 ◆

岩下明裕研究員は 10 月 11 ～ 16 日の間、GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」に関するフォーラム出席及び研究打合せのため、ロシアに出張。また、10 月 17 ～ 19 日の間、同プログラムに関する研究打合せのため、韓国に出張。また、11 月 15 ～ 20 日の間、境界地域ネットワーク JAPAN に関わる BRIT 第 12 回大会出席のため、韓国に出張。また、12 月 11 ～ 12 日の間、研究打合せのため、韓国に出張。また、12 月 23 ～ 29 日の間、新学術領域研究に関する資料収集のため、米国に出張。また、1 月 27 日～ 2 月 1 日の間、新学術領域研究に関する共同研究打合せ及び研究会出席のため、カナダ、米国に出張。

松里公孝研究員は 10 月 26 日～ 11 月 5 日の間、科学研究費研究に関する国際会議（2 件）出席及び研究打合せのため、ロシア、モンゴルに出張。また、1 月 1 ～ 17 日の間、科学研究費研究に関する研究打合せ、資料収集及びフィールドワークのため、ウクライナに出張。

宇山智彦研究員は 11 月 11 ～ 19 日の間、科学研究費研究に関する国際学会における学会報告及び研究交流打合せのため、ロシアに出張。また、12 月 20 ～ 23 日の間、新学術領域研究に関わるインターナショナルワークショップ出席のため、中国に出張。

田畑伸一郎研究員は 11 月 14 ～ 20 日の間、ASEEES（スラブ東欧ユーラシア学会）出席のため、米国に出張。

長縄宣博研究員は 11 月 14 ～ 20 日の間、ASEEES 出席のため、米国に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 11 月 14 ～ 27 日の間、ASEEES 出席及び資料収集のため、米国に出張。また、12 月 13 ～ 16 日の間、科学研究費研究に関する国際ワークショップ出席のため、台湾に出張。また、1 月 5 ～ 10 日の間、科学研究費研究に関する冷戦史研究会及び関連資料収集のため、中国に出張。また、1 月 27 日～ 2 月 6 日の間、新学術領域研究に関する研究会出席、打合せ及び資料収集のため、米国に出張。

野町素己研究員は 11 月 15 ～ 22 日の間、ASEEES 出席及び共同研究打合せ、資料収集、講演会のため、米国に出張。

家田修研究員は 11 月 25 ～ 12 月 9 日の間、科学研究費研究に関する国際会議出席及び資料収集のため、ドイツ、オーストリアに出張。

山村理人研究員は 12 月 9 ～ 21 日の間、2000 年代ロシア農業の構造変動とその地域展開に関する調査のため、ロシアに出張。

年末パーティは今回も盛況でした

(2012 年 12 月 14 日)



有志によるボルシチ、手羽先のコーラ煮、鮭とばアザラシ油添え、ムル貝の白ワイン煮、中華風おこわ、など、個性的な手作り料理が並びました



「みんな、サンタクロースの故郷はどこか知ってるかい？」



スピッツ“猫になりたい”の弾き語りをする院生



教員、研究員、事務係、院生、またその家族などが集まると数十人規模になります

目 次

新学術領域研究.....	1
新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」総括シンポジウム開かれる ／第4班と南京大学共催の国際ワークショップ Reconsidering Empires and De- Colonization 開催	
グローバル COE.....	2
BRIT XII (Border Regions in Transition: 移行期の境界地域) 研究大会を主催／境 界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 一周年記念シンポジウム「日本の国境： 課題と機会」／第8期展示「知られざるクリル・カムチャッカ：ロシアから見た 境界のイメージ」開幕／『境界研究』、 <i>Eurasia Border Review</i> 発行される	
研究の最前線.....	5
ソウル大学ジョイントシンポジウム分科会「ポスト・ソ連諸国における政治状況」 ／2013年度「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」に関する公募結 果／2013年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中／2012年度特任教員（外国人） の変更／専任セミナー／研究会活動	
二都物語：サッポロでヴィリニウスについて書くということ by セオドア・ウィークス..	11
札幌の印象 by パン・ドンメイ.....	13
ロネル・アレグザンダー先生の特別講義を聴講して by 古川雅規.....	16
学会短信	17
2012年度内陸アジア史学会大会の開催／学会カレンダー	
大学院だより.....	18
麻田雅文さんの『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896-1935』出版される	
図書室だより.....	19
『東洋学院紀要 Известия Восточного института』のマイクロフィッシュ購入／ 『歴史評論 Историческое обозрение』のマイクロフィッシュ購入／『帝室正教パ レスチナ協会会報 Сообщения Императорского православного палестинского общества』のマイクロフィッシュ購入	
ウェブサイト情報.....	20
ウェブサイトのリニューアル	
編集室だより.....	21
スラブ・ユーラシア研究報告集5『中央ユーラシア研究を拓く』の刊行／『スラヴ研究』	
会議.....	21
センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同利用・共同研究拠点 課題等審査委員会／センター協議員会	
みせらねあ.....	22
人物往来／研究員消息	

2013年2月25日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	家田修
発行者	宇山智彦
発行所	北海道大学スラブ研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/